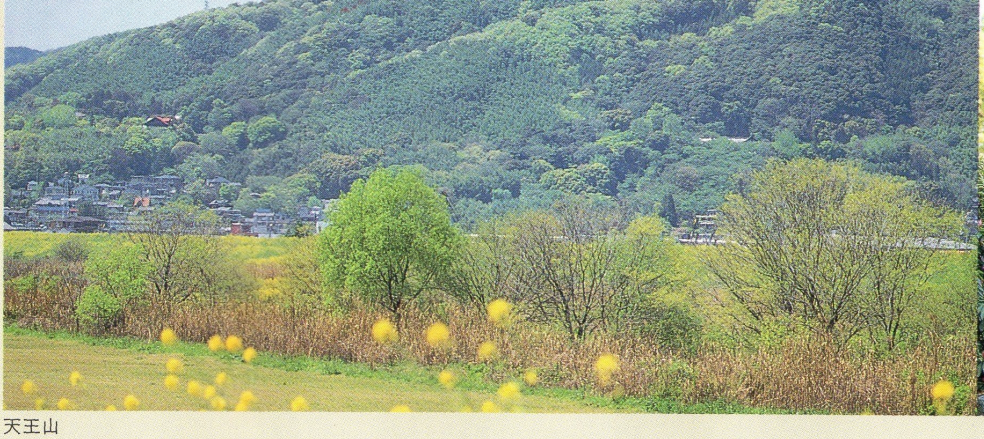


天王山

西日本の古道を歩く

西国街道（さいこくかいどう）
―戦いの道

池田知隆

撮影・山崎豊

「ひかりは西へ」と、山陽新幹線が新大阪から中国、九州方面に走りだしてもう四半世紀になる。いまでは新大阪から北九州・小倉まで二時間を切る速さで結ばれるまでになった。西国への距離は急速に圧縮されていくようだ。

京都と西国をつなぐ西国街道は、名前からしていかにも長い道のりを思わせるが、京都・東寺口から桂川を渡って山崎、高槻、茨木、箕面、伊丹を経て西宮で中国街道（山陽道）までの、車で二時間足らずの距離だ。だが、「京」の都を支えてきた首根っこにあたり、そこには日本の国の歴史が重層的に記憶されている。いわば西国をめぐる時代が圧縮されている。

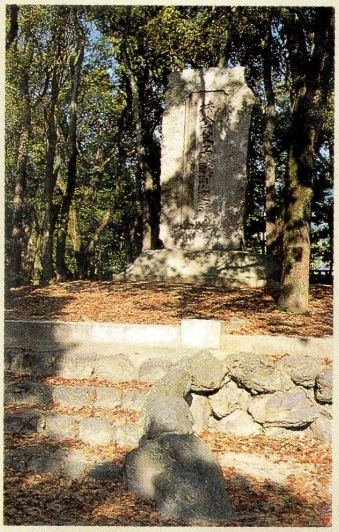
近世江戸幕府の正式な道の名称は「山崎道」である。古来、西国・九州と京都・東国を結ぶ重要な交通路だったが、「西国街道」は庶民の間での俗称だ。京都から淀川の左岸を伏見から淀、枚方、守口、大阪に向かい、尼崎から西宮につながっている東海道という「本街道」に比べ、それは「脇街道」に属していた。山崎道は、本街道よりも、西国への道のりは短く、京都と西国をつなぐいわばバイパス道路。山崎道の名称が消え、西国街道が公称化するのは明治維新後のこと。また豊臣秀吉が朝鮮半島に侵攻したとき、その派兵の道になったことから、「唐（から）街道」という別称もある（「高槻市史」より）。

この道は、「戦いの道」でもある。先史時代から現代に至るまでひときわ多くの「衝突」や「抗争」があり、人々の血と涙と喜びと哀しみがにじんでいる。そして往時の面影を残す町並みや路傍の道標にちょっと目を凝らせば、歴史の記憶が鮮やかによみがえる。

山城国（京都府）と摂津国（大阪府）の国境、山崎は言うまでもなく、豊臣秀吉と明智光秀との「天王山の戦い」の場である。天王山への坂道をのぼるハイキングコースのわきには、樹林に囲まれた「十七烈士の墓」がある。幕末、京都御所「禁門の変」で敗退した尊王攘夷派の長州兵たちが自刃し、果てたところだ。

ＪＲ京都線沿いに街道を西に進むと、楠木正成（まさしげ）・正行（まさつら）の父子の別れの舞台、「桜井駅跡」（史跡）がある。こんもりとした木立ちの中の広場に、「楠公父子訣別之所」の石碑、明治天皇の歌碑がたたずみ、電車からも見える。思えば、楠木正成という人物の評価は、時代とともに大きく変遷した。

リシタン城主高山右近ゆかりの高槻城跡



楠木正成・正行親子の別れの場桜井駅の跡

戦国末期までは北朝側から朝敵といわれ、江戸時代から明治、戦前にかけては天皇への忠誠を尽くすモデルとして人気急上昇、父子訣別のドラマは皇民教育に恰好の題材となった。戦後は、その反動としてほとんど無視されたが、自らが生きる時代と真摯に向き合う姿はいまなお感動させる。

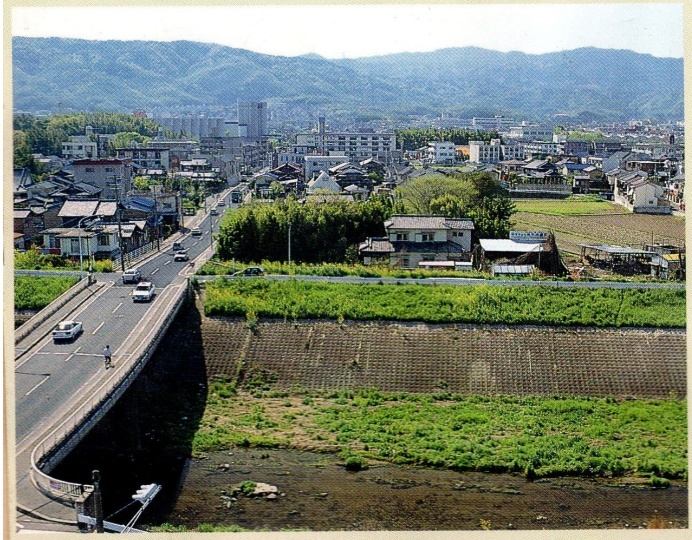
そして応仁の乱のあと城主が目まぐるしく移りかわり、戦国興亡の歴史をしのばせる芥川、茨木、池田の城跡。キリシタン城主、高山右近がいた高槻城。宣教師ルイス・フロイスが「壮大にして見事な城」と感嘆したという伊丹城は、織田信長によって城主・荒木村重ら一族、家臣から下級武士にいたるまですべて殺され、特に悲惨を極めた末路で知られる。

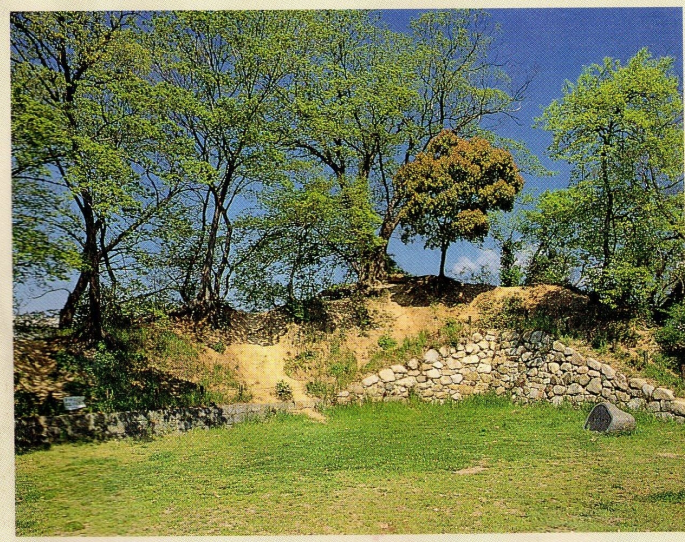
個人的に西国街道を歩いて思い出されるのは、「グリコ・森永事件」だ。新聞社の社会部記者として茨木、高槻の地域を担当していたとき、その事件は発生した。一九八四年三月十八日、日曜日。午後九時半過ぎ。兵庫県西宮市の自宅で入浴中の江崎グリコ社長が二人組の男に拉致、誘拐された。翌十九日午後一時すぎ、「現金十億円と金百キロ」を要求する最初の脅迫状が高槻市内の公衆電話ボックスから見つかったが、その夜以来、この西国街道沿いの地域をどれだけ歩き回ったことか。深夜、夜明けをとわず、ひたすら歩いた。「劇場犯罪」として全国的な注目を浴び、いまもなお未解決の「グリコ・森永事件」の主とした舞台は、ここだった。JR、私鉄、新幹線から高速道路が寄り添うように東西に走る交通の要所のせいもあったのだろうか。それもまた現代における「戦い」だった。

いささか悲話や暗い話題ばかりをあげたが、やがてそれらは伝承され、物語、文学、史跡として歴史に豊かな水脈を形成する。このほか西宮神社の「えべっさん」信仰と傀儡（くぐつ）師、伊丹・昆陽寺の師直（高師直）塚、和泉式部の碑（伊丹市）、弁慶の泉（池田市）、川端康成旧跡（茨木市）、古今集の歌人、伊勢姫ゆかりの伊勢寺（高槻市）、詩人三好達治の記念館（高槻市）、谷崎潤一郎の小説「蘆刈」の舞台になった山崎の渡し跡…など街道沿いの名所は数え切れない。それだけにここには人々の哀歓が濃密にたちこめ、時代の光と影をより鮮やかに見せている。闇は光へと転じ、悲話はロマンにもなる。

交通の発達とともに時の流れはますます早く感じられ、あらゆるものが瞬く間に「遠景」へと消えていく。「新西国街道」と呼ばれ、整備された国道一七一号線では、車の洪水が続く。「新新西国街道」の名神高速道路も拡幅され、「街道」はどんどん「通路」になっていく。そして、その流れから外れた旧街道の隅には、過ぎし日の人々のさまざまな思いがいまも息づいている。旧街道を歩くことは、失われゆく歴史の記憶を取り戻し、未来を生きるために呼吸を整えることかもしれない。光は闇をみつめてこそ、輝きを増す。

（いけだともたか・ジャーナリスト）


山崎付近の風景


荒木村重の居城だった伊丹城跡